

民族音楽指導の基本的視点と授業構成

——台湾音楽の場合を中心に——

八木正一	埼玉大学教育学部音楽教育講座
磯田三津子	埼玉大学教育学部学校教育臨床講座
川村有美	三重大学教育学部音楽教育講座
田中健次	茨城大学教育学部音楽教育講座

キーワード：音楽科 授業構成 諸民族の音楽

はじめに

グローバル化が顕著になった90年代以降、学校においても国際理解教育や異文化理解教育といった分野に大きな関心が払われるようになった。それは音楽科においても例外ではなく、グローバル化を背景に、90年代以降諸民族の音楽指導への関心が急速に高まっていくこととなった。

平成元年の第6次学習指導要領改訂（中学校・高等学校）において、とくにアジア地域の民族音楽の学習が強調されたことともあいまって、諸民族の音楽指導への関心がいつそう高まり、数多くの実践が積み重ねられることとなった。こうした実践は、音楽の多様性の理解と文化としての音楽理解をキーワードにして行われてきたと言っても間違いのないであろう。

学校で推し進められることとなった国際理解や異文化理解教育は、わが国の伝統文化理解と対をなすものとして位置づけられたと言っても過言ではない。つまり、文化的他者の理解のためには、自文化の理解が重要になるといった文脈に位置づけられ実践が模索されたということが出来る。この点が、わが国における国際理解教育や異文化理解教育の特質の一つということにもなる。もちろん、音楽科における諸民族の音楽指導も同様の文脈に位置づけられ、その実践が行われてきたと考えることができる。

われわれは別稿（八木・磯田2013）において、音楽科における異文化理解の系譜をたどりながら、諸民族の音楽指導の特質を明らかにしつつ、実践の問題点と授業構成の基本的な観点などを確認してきた。

本論はそうした作業の延長線上に位置づけられるものであり、すでに提示してきた問題点や授業構成の基本的観点をふまえ、実際の授業のパイロットプランを提示することを目的とするものである。

1. 音楽科における民族音楽指導とその問題点

プランの提示の前に、音楽科における諸民族の音楽指導、異文化音楽学習の問題点を再確認しておこう。別稿（八木・磯田2013）でも指摘したが、音楽科におけるこの指導の原理的・根本的な問題点は、おおよそ次のように整理できるはずである。

- 音楽の背景にある文化的コンテクストを理解することの限界はないのであろうか。

- そもそも異文化を理解するとはいかなることなのであろうか。この点について、音楽科で真剣に議論をしてきたのであろうか。
- 異なる文化は理解できるものだという安易な前提で実践が進んできてはいなかったか。
- 文化理解を標榜して行われている諸民族の音楽の学習であるが、その教材のほとんどはその国や民族の伝統音楽になっているのはなぜか。そうした教材の学習で「今」の文化理解に生きた形でつながっていくのだろうか。

こうした原理的な問題点は、教育内容構成や実際の授業構成にかかわって、次のような具体的な問題を引き起こす結果となっている。

まずは、言葉の適不適はさておき、いわば観光パンフレットの的な教育内容構成とでもいうべき問題がそれである。インドネシアはケチャやガムラン、韓国はカヤグム、ブラジルはサンバといったような形で、広く知られているその国や民族の音楽をステレオタイプ的に取り上げ、内容構成を行うといった問題がそれである。諸民族の音楽として取り上げられている教材群は、「音楽駆け足お国巡り」といった構成になっているといっても言い過ぎではない。こうした観光パンフレットの的な内容構成をどう克服するかが、諸民族の音楽指導、異文化における音楽の学習の再構築へ向けて具体的な課題になるとわれわれは考えている。

また、体験中心的な授業方法の問題も、一度立ち止まって考えてみるべき問題である。これまでに行われてきた諸民族の音楽の指導は、その音楽についての何らかの演奏体験をもとにして組み立てられるのがふつうである。それもせいぜい1～2時間という極めて限られた短い時間での体験である。

そして、そうした体験はその音楽をネイティブとする指導者のもとで行われるのではなく、その文化を他文化とする教師によって指導されるのが通例である。そのような形で短時間に行われる体験にどのような意味があるのであろうか。こうした体験主義をどう克服するかという点も、諸民族の音楽指導、異文化における音楽の学習の再構築へ向けて大きな課題になるといわなければならない。

もちろん言うまでもないが、たとえばサンバを専門とする学校関係者に本格的に長時間指導してもらいサンバを体験するといったようなことを否定するものではない。ここで問題にしているのは、短時間の異文化の音楽体験でもって異文化の音楽を理解した気持ちになるといった現状なのである。

具体的な問題としてさらにもう一点あげておこう。先にも述べたが、現在、諸民族の音楽として授業で教えられているのは、その民族あるいは国家の伝統的音楽が主流である。理解しあわなければならないのは、まさに「今」の私たちである。今、その民族や国ではどのような音楽が行われているのか、伝統音楽を含めて、そこに人々はどのようなアイデンティティを感じているのか等々がむしろ重要になってくるはずである。

もちろん、これはそれぞれの民族の伝統音楽を否定するということではない。その民族の伝統的な音楽を教材化する場合、今、その人たちはどんな音楽活動を行っているのか、そしてそれと那些人々の伝統がどうかかわっているのかといった視点で伝統的な音楽を位置づけていくことが必要になるということである。

2. 授業構成の基本的観点

現在の諸民族の音楽指導あるいは異文化音楽学習の底流には、文化相対主義に基づく発想がある。粗く言えば、すべての音楽はそれぞれに価値をもった文化としてまさに相対的に存在しているというのがそれである。

こうした文化相対主義が異文化教育の発展に与えた歴史的役割にはじつに大きいものがある。同時に、文化相対主義に基づく発想には一定の限界もあるのではないかとわれわれは考えている。つまり、こうした発想による指導は、自らとは異なった文化が一定のコンテキスト上に存在し、それらは等しい価値をもっていることを知った、したがってそれらを否定したり排除したりしてはならないことは理解できたというレベルに子どもたちを到達させる可能性は高い。しかし、そこから一步抜け出すことができないという限界を、どう克服するかという課題がそれである。

こうした限界克服のためには、別稿（八木・磯田2013）でも述べたように、文化的他者との等価値の出会いを基本としつつ、文化的他者との相互交流によってお互いが新しい文化を創造していくといった関係性をどう築いていくかといった視点が重要になるはずである。そのためには、異なる文化の社会的コンテキストを理解しそれを単に認めあうだけでなく、自らの文化との相互作用の中で新しい文化的コンテンツを生み出すパートナーとして異文化を認識することができるような子どもたちをどう育てていくのかという視点が重要になってくるはずである。こうした視点で授業を構成することによって、異文化をそこにある伝統的なものとして硬直化してとらえ、社会的なコンテキストと結びつけることによって理解したことにしようといったやや安直な異文化理解を越える可能性が開けてくるのである。

このような観点および先に指摘した問題点をふまえるならば、別稿（八木・磯田2013）で提示したように、異なる民族の音楽の学習を組織する際の基本的視点が次のように措定されうであろう。

- ①異なる文化圏において、現在、どのような音楽活動が営まれているのか
 - ②それは、その文化の過去やその文化を取り巻く世界とどう関係をしているのか
 - ③そこに、それらとの相互作用がどのように生起し、現在の音楽活動に結果することになっているのか
 - ④そして、私たち日本人は、それとどうかかわり、そこからお互いをパートナーとして新しい音楽やコミュニケーションを生み出す可能性はないのか
- これらはの視点は、そのまま授業構成の視点ともなる。

3. 授業試案「台湾と日本」

そうした4つの視点をふまえて作成したものが、以下に示す授業試案である。

今回は、台湾の音楽を取り上げてみた。理由は次のような点にある。台湾はわが国ともっとも近い国の一つであり、しかも、負の歴史も含みつつ、わが国とは深い歴史的な関係を有している国である。現在も経済的交流を含めて深い関係にあるものの、子どもたちにはあまり認識されていない国である。もちろん、この背景には、中国や国連との複雑な関係、また現在ではわが国との正式な外交関係がないといった問題などがあることは言うまでもない。しかし、実質的に人々の行き来も多く、わが国の隣国の一つというイメージもある。そうした関係にありながら、これまでアジ

アの民族音楽の教材としては取り上げられてきていない国でもある。

とは言え、台湾にこだわったというよりむしろ、台湾を一つの例にして授業構成のモデルを提示してみるとというのが本授業の意図だということは再確認しておきたい。

この授業は、プリントに沿って進める形をとった。対象は中学校3年生を想定して作成したものである。基本的に、配布された以下のようなプリントを読み進めながら、そこでの問題などに取り組むといった形で進めるものである。以下、そのプリントを示しておきたい。

【台湾と日本】パート1 理解する

プリント1

みなさんは、台湾という国を知っていますか。ASUSというコンピュータでも知られています。

次の世界地図を見て、台湾を赤鉛筆で塗ってみましょう。

(地図については略)

プリント2 お話

地図を見てみましょう。日本に近い外国ってどこでしょう。ロシアかもしれません。韓国も近いですね。あるいはこの地図にみるように、台湾かもしれません。日本の一番西の島が、台湾の南東にある与那国島です。今、たびたびニュースになっている尖閣諸島もわかりますか。そこで問題です。

先生が実際に台湾に行って、楽器店の店員さん、大学の先生、町の人に次のことを聞いてみました。

「台湾の人が、これこそわが台湾の歌だ！と思っている歌はどんな歌ですか」

じつは、みんなが口をそろえて「これだ！！」と教えてくれた歌があります。

さて、それは次のうち、どれでしょうか。歌を聞きながら予想してみよう。

- ①阿里山の姑娘
- ②雨夜花
- ③老人飲酒歌

*本プランでの音源については、インターネットで確認できる。

プリント3

正解は、②の雨夜花（ウーイヤホエ）という歌です。大人も子どももみんな歌える、台湾を代表する歌だと思っている人がたいへん多いと言われています。お葬式にも使われると聞いたことがあります。台湾のエバー航空という会社では飛行機の中のBGMとしても使っています。

【おまけ】

この「雨夜花」ってどんな歌でしょう。

この歌の楽譜は次のとおりです。楽譜を見ながらもう一度聞いてみましょう。

雨夜花



この歌の歌詞は次のようになっています。2番からは直訳をつけています。それを参考に、一番だけ、日本語訳に挑戦してみよう。

雨夜花 u ia hoe 周添旺 詞 鄧雨賢 曲
(1934年)

、 雨夜花 雨夜花 受風雨……………

*以下、歌詞については略

*歌詞については、次を参照されたい。<http://www.geocities.jp/abm168/OMOIDE/uyahoe.html>

【おまけ この歌の物語】

興味のある人は読んでみましょう。

1934年、作詞者周添旺が24歳のことでした。よく行っていた飲食店で一人の女性に会いました。悲しい境遇にあったその女性は、次のような身の上話を周さんにしたといます。この女性が少女の頃、同郷の少年と知り合ったけれども、彼は台北（台湾の中心都市）に出稼ぎに行ったきり音信がなくなりました。彼女は少年のことが忘れられず、台北まで少年を探しに行きました。でも彼はすでにほかの女性と結婚していたのです。少女は今さら故郷に帰るわけにもいかず、台北の酒場で仕事をするしかなくなったといます。この話を聞いた周添旺は深く心を打たれ歌詞を作りました。それに鄧雨賢さんが曲をつけてこの『雨夜花』が完成しました。話を聞いたのが雨の夜だったからこの題名になりました。

この曲の哀しいイメージからなのか、台湾ではお葬式でも演奏されていたといます。中にはこの歌に台湾の歴史的な姿を重ねる人もいます。

その台湾の歴史については、また後で勉強します。

プリント4

もちろん、台湾の人たちは、日本人と同じようにいろいろな音楽を楽しんでいます。今、若い人たちの中で人気のあるのは、次のような音楽です。

「乾杯」 演奏・五月天

ひょっとしたら、みなさんの聞いている音楽とあまり変わらないということになりそうですね。

* 「乾杯」は人気ある台湾ポップスの一つである。

プリント5

次の曲も台湾の音楽です。

ちょっと聞いてみましょう。

(プリント3でも聞いた歌です。)

アミ族「老人飲酒歌」

「雨夜花」や「乾杯」のような音楽とはずいぶん感じが違ってきますね。

この歌は、アミ族という台湾の人たちの「老人飲酒歌」という歌です。

それではアミ族とはどのような人たちでしょうか。

- ①中国から移住してきた人たち
- ②フィリッピンから移住してきた人たち
- ③もともと台湾にいた人たち

プリント6 答

アミ族は、台湾原住民と呼ばれる南方系（マレー系）の人たちです。他には、タイヤル族やパイワン族と呼ばれる人たちがいます。もともと台湾に住んでいた人たちです。

ここで簡単に台湾の人たちについてお話しておきましょう。

現在、台湾に住んでいる人たちの中で一番多いのは、17世紀におもに中国大陸の南部から移り住んできた人たちです。

太平洋戦争当時、中国は蒋介石という人がリーダーであった国民党が政治の中心でした。たいへん不幸な歴史ですが、日本は太平洋戦争の際に、中国を侵略しました。これに対して、国民党と毛沢東率いる共産党が力を合わせて日本に抗日戦争という軍事的な抵抗をしました。太平洋戦争末期になって、抗日戦争が勝利し日本軍は敗戦を迎えます。

しかし、それまで力を合わせて日本と戦っていた国民党と共産党が考え方の違いから戦争を始めることとなりました。この戦争では、共産党が勝利し、中国大陸で1949年中華人民共

和国という国を作りました。戦いの相手であった国民党の幹部の人たちは台湾に渡りました。この人たちが台湾の政治をリードすることになりました。

ということで、台湾には、台湾原住民と呼ばれるもともと住んでいた人たち、中国大陸の南部から移り住んできた人たち、戦後、大陸からきた人たちが住んでいるということになります。

さて、次の2曲を聴いて、気がついたことを下を書いてみよう。

- ① 「リターン・トゥ・イノセンス (Return To Innocence)」 (作曲エニグマ)
- ② 「老人飲酒歌」 (台湾アミ族)

*この2曲の関係については、たとえば<http://koichiuno.doorblog.jp/archives/1516145.html>を参照されたい。

プリント7 お話

最初に聴いた曲は、アトランタオリンピック(1996年)のテーマ曲となった「リターン・トゥ・イノセンス (Return To Innocence)」(作曲エニグマ)という曲です。

次に聴いた曲は、台湾原住民アミ族の「老人飲酒歌」という歌です。

わかりましたか。

アトランタオリンピックの方は、台湾原住民アミ族の音楽をもとにつくられているのです。このように、古くからある伝統的な音楽は、もちろん元のまま伝えられることが多いのですが、このように姿を変えながら、新しい音楽シーンをつくりだしているのです。

日本でもこのようなことはないか、探してみましよう。

プリント8 クイズ・なぜだろう？

台湾では、今でも次のような多くの日本語が通じるといいます。さて、それはなぜでしょう。

トマト ハム ガス エンジン ライター

ビール パン ネクタイ

アタマコンクリ (石頭)

(*謝雅梅『台湾人と日本人』総合法令出版 1999年 95pより作成)

プリント9 お話

みなさんも知っているように、日本と当時の中国（清）との戦争の結果、台湾は日本に譲られました。その結果、台湾は1895年から終戦（1945年）までは、日本の領土でした。もちろん、植民地という意味です。

この間、日本は台湾を支配してきたのです。日本は、教育に力を入れたりしてきましたが、それでも突然異国の支配下におかれた台湾の人たちは、とても苦しい生活をしたはずですよ。

この時代、台湾では日本語の教育も行われたので、今でも日本語が残ったりしているというわけです。

先に説明したように、戦後、1949年、中国本土では共産党による中華人民共和国が成立します。国民党の人たちは台湾に渡り、これ以降、台湾は国民党による政権が続くことになります。

台湾は中華民国と呼ばれることもあります。しかし、国際的には中華人民共和国（中国）の一部ということになっていて、国連への加盟も認められていません。したがって、日本とも正式な外交関係はありません。でも、人々の行き来は昔から盛んですし、今では経済的にもとても深い関係にあるのが台湾です。政治的にはやや複雑な状況にあるのが台湾ですが、実際には日本に最も近い外国の一つという感じです。

日本による植民地支配を受けたにもかかわらず、台湾の人たちには、日本に友好的な感情をもつ人（親日的な人々）が多いとも言われています。

今や、カラオケは世界に有名になりましたが、台湾の人たちもカラオケが大好きだと言われています。中でも、日本の演歌と呼ばれるジャンルの歌がとってとても好きで、カラオケでは演歌がよくうたわれるということです。

先に、「雨夜花」を聴きました。

たとえば次の「矢切の渡し」という日本の演歌があります。これも台湾の人たち、とくに年寄りの人たちはよくうたうと言われています。

次のような楽譜です。

*楽譜 略

【問題】

先の「雨夜花」の階名とこの「北酒場」の階名を見て、何か気がつくことはありませんか。気がついたことを下を書いてみよう。

「雨夜花」の階名

ソラソミ ミレドラソ ドレミソドレ ミレー
ソソソソソミ ミレミドラソ ソラソミ ミレド

「北酒場」の階名

ソソソ ソミレドソ ミミミ ミソドドレ
ドドミレド ソソドラソ ドドレミソソミレミ

パート2 発信する・交流する

プリント1

この学習の一番最初に、「台湾の人が、これこそ台湾の歌だ！と思っている歌はどんな歌ですか」と聴いて、「雨夜花」が一番だったことを知りました。

それでは、今度はみなさんの番です。

「この歌（あるいは音楽）こそが、日本を代表する歌（音楽）だ！他の国の人たちにぜひ知ってもらいたい日本の歌（音楽）だと思えるものをグループで1つ（あるいは2つ）探してみましょう。

そして、なぜそう決めたのか、その理由も下に書きましょう。

プリント2

【作業】

台湾の音楽について、もっと調べてみよう。

そして、台湾の音楽と日本の音楽の交流イベントをしたら、どんなイベントがよいか考えてみましょう。

おわりに

本稿の目的は、民族音楽に関する授業構成の視点を再確認しながら、それに沿って作成されたパイロットプランを提示するということにあった。

今回提示したパイロットプランは、一般的に行われている諸民族の音楽指導とはかなり色を異にするものとなった。とりわけ、演奏活動を取り入れていないという点に関して賛否が分かれるのではないかと考えている。あえてこうしたプランに挑戦したものであり、その意味でひとつのパイロットプランと言えるのではないかと考えている。言うまでもないが、すべての諸民族の音楽指導が、本プランのような形で構成されなければならないという訳でない。あくまでこれまでの諸民族の音楽指導を振り返るひとつの材料として位置づけたい。

今後、実験授業をふまえながら、これまでの諸民族の音楽指導との相違点を明確にしつつ、さらにプランに修正を加えていくことを課題としたい。

*本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号24531101(研究代表者:八木正一)の成果の一部である。文章責任は八木にある。

引用および参考文献

謝雅梅 (1999) 『台湾人と日本人』 綜合法令出版

酒井亨 (2011) 『台湾入門』 日中出版

菅野敦志著 (2011) 『台湾の国家と文化』 勁草書房

菅野敦志著 (2011) 『台湾の歴史と日台関係』 早稲田出版

林穂紅編 (1997) 『チャイニーズ・ポップスのすべて 香港・台湾・中国』 音楽之友社

松永正義、劉進慶、若林正丈 (1990) 『台湾百科』 大修館

八木正一・磯田三津子 (2013) 「音楽科における異文化理解実践の系譜と課題」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』 No.12

若林正丈 (1994) 『東アジアの国家と社会2 台湾 分裂国家と民主化』 東京大学出版会

(2014年3月22日提出)

(2014年4月18日受理)